

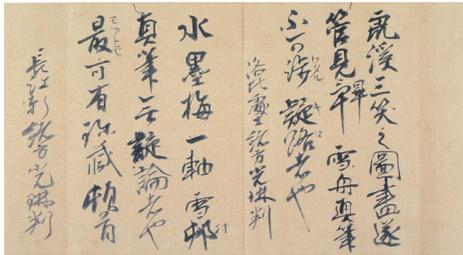
生涯と造形のルーツ

一、乾山の伝記・年譜を礎として

乾山手跡



乾山書 人麿詠和歌



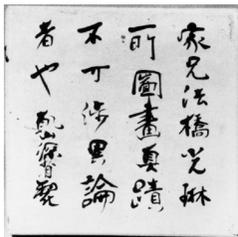
乾山書「光琳覚書帖」部分 「小西家文書」 旧文化庁

光琳・乾山合作画稿



光琳画・乾山書 柿本人麿像「小西家文書」 大阪市立美術館

乾山焼



乾山書 布袋図角皿裏面



光琳筆 綉絵布袋図角皿 藤田美術館

はじめに乾山の生涯、乾山焼の創始を考える。年譜を作成、関連事項、やきものでは造形のルーツを探り、兄光琳の助力の大なることを確認した。

「小西家文書」には光琳画、乾山書による画稿「人麿像」が残る。覚書帖には乾山筆極書の書例がある。同文言は乾山焼布袋図角皿裏面にも認められるが、兄弟合作、歌仙絵制作など、鳴滝窯創始の構想は、両者が久しく交流を重ねた家職歌道撰家二條綱平、同家サロンの影響下に始まるものと考えられる。光琳屋敷、乾山「習静堂」への綱平御成、鳴滝窯も同家山屋敷跡に築かれており、乾山焼は二條家及び光琳の助力の下に開始されたと判断する。

二条丁子屋町への移転時には光琳意匠が大流行。乾山焼も服飾意匠雛形本、髹漆意匠へと転換するが、趣味人・文化人の嗜好・画讀様式は簡略化、一般向け・琳派様式・意匠へと道を広げる。

光琳は乾山焼における作画、意匠、陶法書には『陶磁製方』『陶器密法書』に名が残る。

若年時に蓄積した文人、散人の修練を、乾山は、やがて光琳と同じく陶匠、絵師など、プロとしてのキャリアに変えてゆく。

二、乾山焼…発想とデザインの資源
物語絵

服飾意匠 雛形本



色絵『源氏物語』『橋姫』図香合
旧バン・ホーン家コレクション



「橋姫」
源氏物語絵扇面散屏風
浄土寺 広島県尾道市
室町時代（一五世紀）



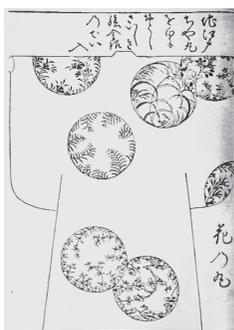
銹絵染付隈笹文茶碗 ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館



『友禅ひいなかた』根笹（隈笹）



銹絵染付土器皿（八重葎） 根津美術館



『友禅ひいなかた』花の丸（八重葎）

ここでは乾山焼の様式、デザインとその資源を考える。

江戸中期、人々の暮らしは安定、教育も著しく普及した。伴って出版物も急激な進展を遂げるが、学術書から文学、遊芸、服飾、料理本など、類書、絵本・絵抄、画譜や花譜が刊行される。特権階級の手にあった古典文学が庶民のもとに花開くが、かな交じりの絵本、囃本、読本など、重宝記、嵯峨本、雛形本が人気を集める。茶人、工人、文筆家、各分野に町人の活躍もめざましく、漢詩会、茶会、俳会、寄り合いにおける情報が錯綜する。

乾山焼は大衆文化を離れて語ることはできない。時代に呼応、意匠・文様に影響を受けるが、初期、やきものは二條家サロンのもと、平安期の風雅とその香に着目する。物語絵を取り入れ『伊勢物語』『源氏物語』など、古典の画趣を細密な筆画、豊かな色彩、情景を想定し、山や山道、谷の有様を形態に表現する。

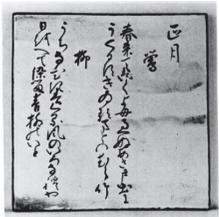
正徳期には刊行物も大衆化、古典の要素は一般化し、図柄は大きく象徴的。丁子屋町へ移転した乾山焼も色彩を押しさえ、形態、様式を単純化。一例であるが、光琳雛形本を手本として暗色の素地に対照の白化粧、地味な鉄・呉須絵具に一点豪華な金彩を交えるなど、分かり易く、大胆な構想、洗練化への道を拓く。

五、乾山焼・画讃様式の研究 和歌 物語 謡曲

日本の主題 定家詠十二月花鳥図



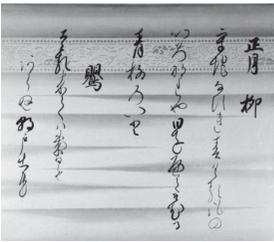
色絵定家詠和歌十二月花鳥図角皿 正月図
MOA美術館



同上角皿裏面
正月和歌



狩野探幽筆十二月花鳥図画帖
出光美術館

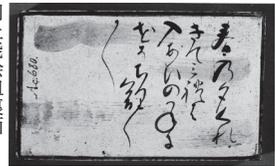


同図正月和歌

能絵



色絵「道成寺」能絵皿
デンマーク国立博物館



同上能絵皿裏面



伝観世小次郎信光筆謡本表紙「道成寺」
法政大学能楽研究所

画讃様式、「和」の出典は、和歌・『拾遺愚草』『雪玉集』他物語・『伊勢物語』『源氏物語』他謡・絵入り謡本、能絵かるたなどに見い出せる。

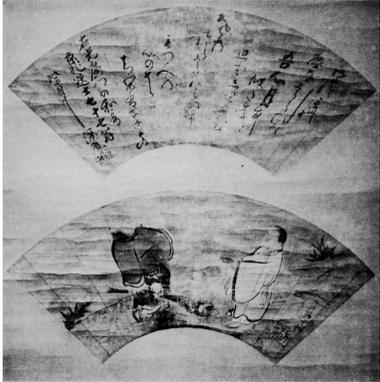
平安期には屏風・絵巻・帖などには四季・月次・名所絵などが描かれていた。探幽筆月次図(左上図)も伝世するが、『鴨羽搔』(元禄四年)が刊行。一般にも定家十二月和歌図、瀟湘八景和歌図などの手本が呈示された。物語絵は見所となる情趣・情景、主人公の心情を絵と詞章を交えて描くが、手本は嵯峨本、絵抄・画帖などにより、かるた形式は読み札・取り札遊びの面白さは茶の湯の七事式にも窺われる。

謡曲は、室町後期囃子を省いた素謡が流行した。江戸期には種々の謡本、注釈本が刊行されるが、表紙の装飾は一般向け。一つに主題、内容を象徴する図柄、二つに内容には関わず、雲母摺りの表紙・料紙、図を描くなどの二種がある。乾山焼にも色絵具を用いた具象表現、図柄を大きく、文様として独立させた抽象表現がある。能道具など、物語を象徴する「つくりもの」などの影響を考える。

六、尾形乾山…書・画作品と「小西家文書」
和歌短冊皿



烏丸光廣詠和歌「寒山・拾得」短冊皿 静嘉堂文庫美術館



絵画 光琳画・乾山書合作様式

絵画 寒山・拾得図扇面
『美術画報』一八九九年刊



同上短冊皿裏面 乾山書・銘



絵画 拾得図

絵画 乾山画讃様式

乾山は書を得意とした。やきものに書を用い、乾山焼の一大特色を築くが、日本の陶芸史上、はじめての試みであった。

短冊を皿とする構想も意表をつくが、「寒山」「拾得」「本来面目」皿は、「乾山八十一翁」江戸下向後、入谷村における最晩年の作陶である。成形は不揃い、歪みもあり、釉薬の溶解には不具合がみられるなど、基本的には老陶匠独りの手立であったと考えるが、書式の心得、堂々とした筆跡は乾山自らの筆であることを証している。

和歌は、江戸前期、烏丸光廣（一五七九—一六三八）詠、『黄葉和歌集』（元禄二—一六〇三）細川幽斎から古今伝授を受け、三代將軍家光の歌道指南に携わる。一絲文守との親交、後水尾院の信任も厚く幕府との交流に努めるが、家康柩遷座にも携わるなど、紀行文『日光山紀行』が残る。光廣二男六角広賢は初代輪王寺宮・三代寛永寺門主守澄法親王（後水尾院第三皇子）の江戸下向に随伴、幕府、寛永寺に関わりをもつ。

乾山の老境もあろうが、禅への興味、烏丸卿、輪王寺宮家など、同皿にはそれらの所縁も推考できるのではないか。

同じ画題は絵画にもあり、宗達風光琳扇面画には法橋光琳「方祝」印、和歌は乾山書「右光廣卿の和哥 京兆逸王七十七翁紫翠深省」不明印がある。乾山画は文人の墨戲的風趣をもつ。が、即興、遊心の表現模倣こそは難しい。

工房と出土陶片 陶法とその伝播

七、乾山焼・陶片資料とその工房

鳴滝窯出土陶片 かな書 漢字書

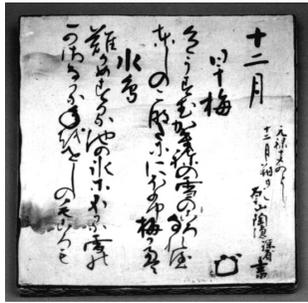


鳴滝窯出土陶片(角皿) かな書
(推定家詠和歌十二月花鳥・十二月)
石水博物館



鳴滝窯出土陶片(茶碗) 漢字書
(銚絵山水図茶碗) 法蔵寺

現存作品



色絵定家詠和歌十二月花鳥図角皿裏面和歌 MOA美術館

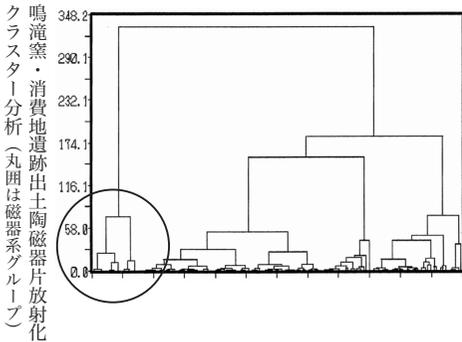


銚絵山水図八角皿

磁器破片・胎土分析



鳴滝窯出土磁器片 漳州窯摸倣(呉須赤絵摸倣か) 法蔵寺



ここでは考古学的視点に立ち、生産地遺跡、消費地遺跡出土の乾山焼陶片を考察。陶片は、一つに製作したやきものの種類、二つに技術を知る上で重要である。現存作品との関わりを証し、本流には至らなかつた作品類の製作も伝えるが、鳴滝窯では呉須を施した漳州窯摸倣の磁器製作、織部模倣、楽焼(推定)などの試みが判明する。

化学分析に依り使用土と粒子、その組み合わせ、産地の確認なども可能となるが、陶法書に照合、さらに素材・顔料、技術面の内容が分明。消費地遺跡出土の陶片などを照合すれば、真贋判定にも有益である。

上図、クラスタ分析は、鳴滝窯使用の磁器土、推定比良土・豊後土、後に応用した有田焼素地に示された結果である。乾山窯の肥前様式は有田焼の素地に一致。本焼上の絵付素地は、自作他作を論ぜず用いるとした言を証明するが、右図の呉須絵具による磁器製作は漳州窯の摸倣である。比良土、豊後土の合土と推定、赤絵具を加え、呉須赤絵とする心算か、伝世作品には唐子筆筒、瓔珞文蓋茶碗などが残る。

呉須赤絵は茶の湯の盛行に伴って桃山期から寛永頃に人気を集めた。やがて茶人の嗜好は祥瑞、古染付(南京旧器)へと移行をするが、出土したかな書(十二月花鳥皿)、漢字書(山水図茶碗・八角山水図皿)には同句がある。陶片は、大旨数寄者・文人などを対象とした画讃様式、これら国内外の裝飾陶磁器・古器の摸倣は、茶人・文人など趣味人を対象としたものと考ええる。

八、乾山焼…陶法書とその伝播

陶法と作品



色絵『源氏物語』「夕顔」 図茶碗

大和文華館



乾山庭焼

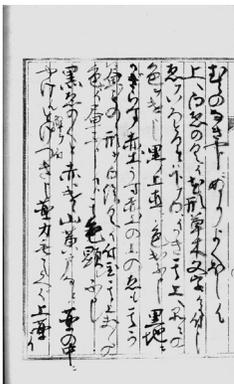


色絵夏木立図皿 瀧澤鐵竹堂資料館



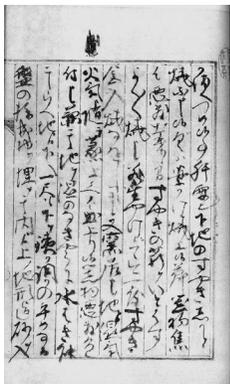
同上夏木立図皿裏面 乾山銘

乾山焼陶法書『陶工必用』



『陶工必用』

「内かまゑのくの方並地ぬり色々在之候方」
大和文華館



『陶工必用』

「乾山一流内かまゑのく焼方ノ事」

乾山焼とその陶法の実証である。

元文二年（一七三七）乾山は『陶工必用』

を著した。一つに文書として京焼の歴史、

二つにその技術、三つに乾山自らのやきも

のに対する志向を述べる。本窯仁清伝、内

窯孫兵衛伝、乾山独自の陶法、以上三部か

ら成るが、乾山一流として上図「夕顔」図

茶碗に關与する記述がある。

京焼、及び後世への大きな遺産となった

白絵具の活用は特色があり、惣地黒塗りに

は、必ず下地に白絵具を施す必要のあるこ

とを説く。文様描きにも重ねて個々の文様

下に白絵具を塗り、色絵具を施すとある

が、発色の工夫、焼中釉薬に化合、溶解す

る鉄分主体の絵具に対する注意である。書

を書き入れる場合にも黒地に對しては白絵

具が適すとあり、陶法、色彩、書画の構

成に文学的情趣を加味。陶匠かつ文人、數

寄者であつた乾山の才量を示す。

色絵夏木立図皿は、佐野における庭焼で

ある。元文二年野州へ旅し、『陶磁製方』

を認め、庭焼を指導するが、焼成には難が

あり、絵具、釉薬の溶解が不十分である。

素地は入谷村の詠品と考へるが、『陶工必

用』には内窯焼成の釉薬・絵具・窯詰に關

する注意がある。素焼の大切さ、火氣、火

勢に伴う窯入調整、引き出す折のタイミン

グなど、別して窯の設置場所、湿氣への氣

配りが窺われる。

庭焼は素人衆の集まりであつた。口授、

書面の指導に異なり、実技・庭焼は不出来

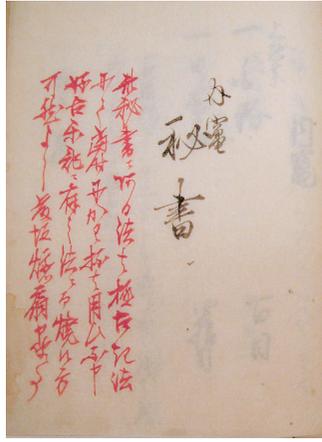
に終るが、窯焚の難しさ、特に終盤、陶

工は決して氣を抜くことは許されない。

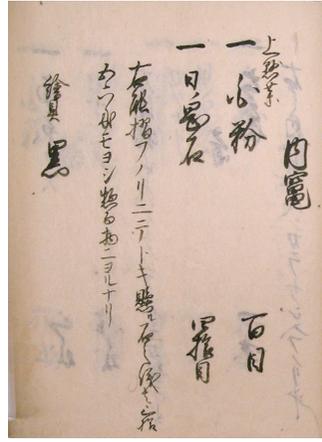
乾山江戸篇

九、乾山焼…その遺産

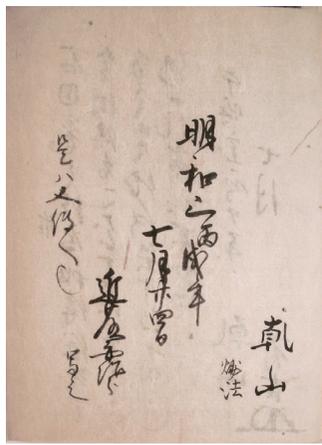
新資料「内竈秘書」(「初代乾山口述二代筆記」)写本…合冊本『樂燒秘傳』の一書
(都立中央図書館加賀文庫)



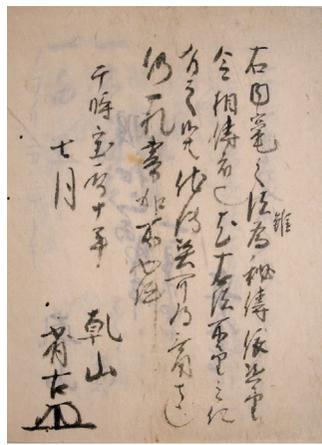
「内竈秘書」④



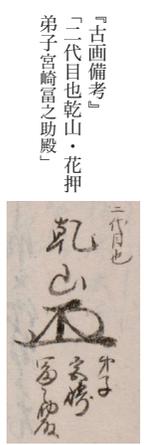
「内竈秘書 上懸薬・繪具」の調査



「乾山焼法」
「明和三丙戌年七月廿四日近藤安治郎写之」



「干時 宝曆十年七月乾山省古・花押」



「古画備考」
「二代目也乾山・花押」
「弟子宮崎富之助殿」

新たに見出し出した「初代乾山口述二代筆記」の陶法書(写本)である。「内竈秘書」とあるが、合冊本『樂燒秘傳』好古樂記「淇水軒」中の一書である。合冊本は単冊を適宜に集成、内容よりは情報量を重視するなど、ここでは土拵え・素焼・樂燒、享保九年刊『百工秘術』の抜萃書写を含み、江戸後期以後に盛行する素人作陶家、陶法書の特質を示す。「内竈秘書」は書写近藤安治郎。「乾山焼法」「明和三年」さらに「宝曆十年」とあり、江戸入谷村における乾山焼内竈陶法、釉薬、絵具ほかの調査を伝える。内容、奥書、花押、その他から久しく行方知れずであった江戸入谷村乾山二代次郎兵衛筆記の写本と判断する。



『樂燒秘傳 好古樂記 淇水軒』
表紙①



「好古樂記」



「明治庚午十月色樂代銀積」②



「智術全書之内磁工門之部 土器秘傳書」③

初代乾山には二冊の自筆陶法書が現存する。『陶工必用』『陶磁製方』である。

そのうち内窯陶法に関しては上葉・絵具を抜萃、享保一七年、書状を以って佐野の素封家大川頭道へと送り、頭道は手控『陶器傳書』にそれを記録。一方、江戸入谷村には二代乾山次郎兵衛がおり、乾山の口述を筆記、のちに「初代口述二代筆記」とする陶法書を認めた。『古画備考』によれば同書は明和三年三月三代宮崎富之助へと渡り、貌庵筆「乾山世代書」によればその後酒井抱一・西村貌庵・三浦乾也へと伝承が、度重なる災難に遭遇、今日、消失したものと考えられている。が、このたびその写本を加賀文庫（都立中央図書館）に見出した。

内容、奥書、年紀・書者の花押型、『古画備考』の記載事項によって二代乾山次郎兵衛筆記陶法書の写本であると判断するが、同書は、合冊本『樂焼秘傳・好古樂記』淇水軒（縦一九、二センチ、横一六、〇センチ）中の一冊である。

① 『樂焼秘傳・好古樂記』

② 「色樂代銀積」

③ 「土器秘傳書」（「百工秘術」磁工門の写本）

④ 「内窰秘書」（初代乾山口述二代筆記）

以上四部から成り、明治三年（一八七〇）記「色樂代銀積」を含むことから、成立は明治期であろうと考える。表紙下方には「淇水軒」とある。淇水軒は『樂焼秘傳・好古樂記』を纏めた藤垣爐扇・俗名小林源兵衛、天保時代の俳人であると推測する。

爐扇は「好古」を評し、「俳諧・書・画に妙、自樂と稱し一己之奇人なり」と記し、ともに俳諧、樂焼を娛し、同書を纏めた」と述べるが、好古老人は俳諧を関西俳壇笠下風、樂焼を樂吉左衛門隱宅手代紋右衛門より習得。同書には土・下地拵え・素焼・赤樂・白樂、また樂焼以外の繪葉・上葉、磁器に関する事項もあり、刊本『百工秘術』（享保九年刊）の抜萃書写を含むなど、江戸後期以後に盛行する素人陶芸家・陶法書類の特徴を示す。

「内窰秘書」冒頭の爐扇の言葉は朱書である。此の秘伝は極めて古く、今日用いることとはないと述べ、代わりに『樂焼秘傳・好古樂記』に記載した別法を勧めるとあるが、ビードロを用いない絵具はもはや古いと記す。時代の需めか、絵画的絵付も少なく、古式の風趣を伝える絵具を使いこなす技能も不足か。江戸では俳諧・浮世絵・歌舞伎が盛行し、時代は俄に結果を求める即興・即席の風潮に溢れていた。

「内窰秘書」は内窰陶法、「初代口述二代筆記」の写しである。内容は二冊の乾山自筆陶法書、頭道手控にほぼ一致、乾山自慢の豊後土の記載もあり、奥書「乾山燒法（異筆）明和三年丙戌年七月、末尾に加えられた「宝曆十年七月乾山省古」花押型などにより、江戸入谷村乾山燒二代次郎兵衛筆「初代口述二代筆記」の写本であると結論する。

